NO１２８

１学年だより

令和３年11月22日（月）

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

竹取物語

１９日（金）は、夜空のドラマ、月食を楽しみました。月が欠けていくのも神秘的ですが、月食の後に月が満ちてきて、満月に戻るところが印象的でした。月の光が戻って、満月が再び夜空に輝いたときに、欠ける前より光が優しく感じました。

昔の人は、月の陰影をウサギがお餅をつくところに例えたりしましたが、太陽とは異なり、ただ、まぶしい限りに輝くのでなく、陰影を伴った月に憂いを感じます。月食から満月に戻った月を寒さを忘れて見つめました。 秦野駅では、冬になると駅前の水無川がイルミネーションで素敵に演出されます。水無川にかかる「まほろば橋」の時計台にツリーのようにイルミネーションが飾られています。夜空を見上げるとイルミネーションが天の川のように見えました。天の川の向こうに大きく満月が輝いていました。この日、日本中の人がこの天体ショーに心をときめかせたのだと思います。

欠け満ちて　心揺さぶる　月明かり　寒さ忘れて　望月を待つ

平安の人々も月明かりとともに生活していました。毎晩見る月に、ロマンを感じたのでしょう。平安時代の前半に書かれた「竹取物語」はとてもロマンチックな物語だと思います。これだけの話を創作した作者がわからないというのも、今となっては神秘的で良いと思います。

月から、人間界に罰として送られてきたかぐや姫は、いったいどんな罪を犯したのでしょうか。月の世界での罪とはどんなものだったのでしょうか。月から追放されたかぐや姫が月の世界から比較したら不浄である人間界で恋に落ちることなど考えられないことです。しかし、あまりのかぐや姫の美しさに多くの貴族たちが求婚してきます。人間の世界では、解決できない要求を貴族たちに投げかけます。当然、誰もがその要求をクリアーすることは出来ません。最後にかぐや姫に求婚してきたのは帝（みかど）でした。帝は、自分の気持ちを和歌にしてかぐや姫に伝えます。帝の誠実な真っ直ぐな心にかぐや姫の心には変化が現れます。人間を好きになる事などない、月のかぐや姫に帝の和歌を受け止めていく心の変化が出てきます。やがて、かぐや姫も帝に和歌を返します。人の心に打たれるかぐや姫の心も揺れるのです。

８月１５日の満月の日に、月の使者がかぐや姫を迎えに来ます。月の光を浴びるとかぐや姫の中に生まれた人への感情は全て消えていきます。かぐや姫は、振り向きもしないで、月へ登っていくのです。残された、帝と育ててくれたおじいさんとおばあさんに手紙と不死の薬を残して。

かぐや姫が月に帰った後に帝は悲しみに暮れて、かぐや姫がいない世に永遠に生きても何になろう。と嘆き悲しんで、日本で一番高い月に近い山で不死の薬を焼いてしまいました。「その山は、不死の薬を焼いた山なので「ふじの山」とよばれた。そして、いまでもその焼いた炎は消えずに煙をはいている。」と言って物語は終わっています。とてもロマンチックなお話ですね。国語では竹取物語を学習するそうです。是非、平安の人々の感性を楽しんで欲しいと思います。最後に物語でかぐや姫と帝が詠んだ和歌を紹介します。

「今はとて　天の羽衣　着るをりぞ　君をあはれと　思い出でたる」
「逢うことも　涙に浮かぶ　我が身には　死なぬ薬も　何にかはせむ」